

❖ 自らを越えて (2)

❖ 多谷 昇太



【中学入学時、初クラスでの自己紹介時における変身!の表象】

(二) 成績発表

高校進学時には初クラスでの自己紹介などなかった。中学時同様にアイウエオ順に近い席決めとなり男女も混合であった。当初は中学時代の余勢を駆ってまわりの連中との会話に勤しみ浮き上がることもなかったが、ただ女子とのそれは至って苦手で（と云うよりも奥手で）殆ど無視を決め込んでいた。前席の浜田という男子生徒や二三席離れたところにいた高木とかいうやつと気が合ってよくしゃべり、特に浜田とは連れ立っていっしょに昼食を取りなど行ったものだ。その時は気づかなかったがこの浜田が他人に対してよく目の行く生徒で（前章で述べた既に自分本位ではない、他人指向の出来る生徒だった）、一方高木の方はこちらは単にお調子者の類、即ち形を変えた未だ自分本位なやつでしかなかった。しかし斯く云う俺自身が高木を越えるその範疇の手合いだだったので、自分を受け入れてくれそうな他生徒と出来るだけ多く繋がりを持つとうとしているのに過ぎなかったのだ。ただそれをいかにして？が問題なのだが、高木のように自分を剽軽にアピールするならまだしも、件の成績指向のままだった

たから、勉強が出来ることを皆に知られるならば、そのうち求めずともそれは得られるだろうなどと高を括っていたのだ。とにかく、クラスメートに受け入れられることが一大命題でありながら、その為に他の生徒を理解しよう、こちらから関係を求めて行こうなどとはしなかった（できなかつた）。浜田が純粹な親交を求めてくれたのにも拘らず、剽軽な高木に目が移ってしまい、彼との仲の良さを示そうとしたり、また他の生徒すべてに八方美人的な（しかし受け身的な）態度でしかなかつたものだから、そういうする内にととう浜田からも愛想をつかされてしまった。背が高く髪の毛が自然な茶色で、色白だったが男らしいやつだった。俺のみならず誰に対しても自然体で、相手への理解を先とするような浜田。彼に習いながらこれを良き友とすべきだったのだが豈図らんや後の祭りというやつである。高木などは俺の力量をすぐに見限つて、幾許もなくけんもほろろになつてしまつたし、学期が代わつて席順なども変わるにつれて俺の孤独の影は徐々に深まつて行つた。またぞろすっかり忘れていた小学校時分の悪夢が再燃しそうな雰囲氣となつて来た。ずるずると蟻地獄に落ち込むような塩梅ののだがさ

てこの頃のこと、前章で綴つた守護霊とは真逆の存在が、むくむくと俺の心の中でそのテリトリーを広げようとしていた。そこでも記したようにこれをそうと認識するのではなく、自分の思念そのもののようにただぼんやりと意識するだけなのだが、ただここで問題なのはそれが守護霊どころか何と称すべきか、一種黒い霧とでも説明する他はない、モヤモヤとした鬱積の塊りのような塩梅でもつて、しかし確実に俺の心の一面をそれが占めるようになっていたことなのだ。そのゾーンの特徴を云えばやたら自嘲的でしかしそれと同時に進行形で他人にもやら侮蔑的なのだった。小学校時分と違つて自意識の度合も進み、語彙も豊富になつていたぶん俺に対するそいつの決めつけ方も当を得た、俺からすればきついものとなつていた。ただそれは飽くまでも一人称の相互思念として意識されるのだ。こんな具合にである。「ちえつ、俺つてやつはまったく意気地なしで、面白味のないやつだなあ。皆から弾かれて当然だよ」「ふん、そうそう、その通り」「女みたいに相手から話しかけられるのを待ってるだけで、つんで自分から口を利くことも出来やしねえ」「まったくくなあ、その通りだよ」などという塩梅だが、

しかしその相互思念中の「俺」を「お前」に置き替えてみるならば、これは立派な二者による会話なのであって、それを装った一個人の中における想念間答とはこれは云えなくなる。つまり、放置して置けばハッキリとこれは「危険」な兆候なのだが、前記したようにそれへの他者認定など考えることすら覚束ず、ただ徒にその一人称的相互思念に馴れるのみ、いや侵されるのみであったのだ。とにかく、こうして浜田と高木をここに挙げてみせたのは、自分本位のままなのか、あるいは他者指向が出来るのかという、己における人間完成度如何を示すモデルと云うか、表象として両君にご登場願ったのであるが、結果的にそのどちらのタイプにも俺はなり切れなかった。いや、そのどちらのタイプからも謂わば「中途半端者」として嫌われてしまったのだ。代わり

に心中の新たな友たる一人称想念の相手、つまり黒い霧との交誼が深まって行ったのだが、因みにこの時期、つまりかの名作『若きウエルテルの悩み』で云うところの、疾風怒濤期たる青春時代を捉えてのこの黒い霧の登場の理由は、文字通り彼本人がウエルテルであるからだろう。疾風怒濤期などと云えば聞こえはいいが換言すれば「情念的に甚だ不安定な

青春時代」なのであり、それでも他人指向が出来るのならシャルロッテを求めようが、それならぬ俺ならば孤独と孤立への不安が、語弊があるが「青春の生命力」分だけ、無意識レベルではあってもきつと強かったのだろう。それゆえの黒い霧出現だったがしかし繰り返し返すがこの時は悉皆そんなものには気づかず、ただただ花の中学時代の再興を期していたのだった。

ところでちょっと話が逸れるが、ここで論じている友の有無やその功罪を語るに、かの大・正覚者たる仏陀の言葉でこういうものがあるので紹介したい。「良き友の存在は仏道修業のすべてである……と云ってもいい。お前たち（仏弟子）もこれからは良き友の為にひたすらに生きよ」というものである。浜田と高木はこれへの寓意として使わせてもらったとも云えるが、しかし実はそんな寓意どころではない、お釈迦様のこのお言葉の何たるかを、切ないほどに身で感じさせてもらえる人が、このあと章を変えて登場することとなる。はからずもそれは女性だったのだが、それを語るの今はしばらくお待ち願いたい…。

さてこんな理など未だつゆ知らず、迷妄の真つ只中にあつた俺は何とかクラスメートの好意を得ようと、ただひたすら勉学に勤しむこととなつた。予習復習を怠らず心中で『ちきしょう、ちきしょう』と毒づきながらの凄惨な行だったが却つてそれが励みになったものか、一年生の終り頃にはかなり結果が伴うものとなつていた。しかしその結果とは単に成績だけのこと、皆からの好意・厚遇は相も変わらず得られず、「孤独の村田君」でしかなかつたのだ。都度行われる全校的テストで好結果を出して、成績優秀者として廊下の掲示板に名が張り出されることがあつてもそれは同じだった。呻吟の日々が続いたがそうこうする内に迎えたその年の期末テストでのこと、出題への読みがピタリと当たつて、その試験結果には充分過ぎるほどの自信があつた。いつものように廊下に模造紙で張り出された成績優秀者名簿を見ようと、俺は一階職員室横の掲示場へと赴いた。そこには十数名ほどの生徒たちが既に屯して何やかやと論じ合つている。その陰からそつと模造紙を覗いてみると、何と、この俺の名前が最右端に記されてあつた。「村田建三郎」と確かに一番右に記されてある。俺は「やったー！」とば

かり心中で舞い上がり、且つ顔が紅潮してくるのを止められなくなつた。今度こそはこの俺が一番である。無視できるものならしてみるがいいという気になさへもなる。まったく、中学時代以上の立派な成績をこうして都度示しているのに、なんで皆は俺にチヤホヤしないんだ？俺を持ち上げようとしなんだ？…が正直なところだつた俺に憤懣のやる方などありようもなかつた。今度こそはそういうことはあるまい、ここからが中学時代の再来となる、ようやく花の高校生活の始まりだ…などと妄想したその瞬間は、確かに高校時代におけるその指向での最幸福な一瞬だつたらう。しかしその直後にそれとは真反対の、恰も崖下に突き落とされるような、最悪の体験が迫つてのことまでは、その時はまだ気づかないでいた。俺は何とか気の高まりを抑えながらやおら廻りの生徒たちの反応に気を配り始めた。耳に心地よいに違いない皆の反応を聞こうと、その耳をそばだてたのである。まず前にいた男子生徒二人連れの会話。「村田？村田つて誰だい？」「知らねえなあ、そんなやつ」にしかしガクツとくる。知らないとは何だ！？いやしくも入学来一年近くを共に校門をくぐつた仲ではないか…などと心中で抗

議したが、もつとも普段“教室内ニート”をしていて我が身に照らせば彼らの反応も仕方ないかとも思ってしまう。第一こつちだつてその二人の顔を知らなかつたのだから（普段から歩く時は下ばかり向いていて他人の顔を見ないのだ）。彼らの向こう隣にいた女子生徒二人連れは些かでもましだった、少なくとも俺の名前を知っていたから。「村田建三郎だつて：凄い名前。よくここに出てるけど、どんな子だつて？」「知らない。村田健次君と間違えたんじゃない？」「違ふわよ。だいいち健坊なんてボンクラじゃない」「あ、そうか。じゃあたぶんドワンゴ（通学・通信とも可能な私立校）タイプの子よ。普段は家に居て通学してないのよ」「おめーな、ここは県立だつちゅうの」：俺は透明人間か！？と抗議したいが出来る俺ではない。この予期しない反応に少なからず面食らっていると今度は見知った顔の生徒がやって来た。つまり同クラスの男子生徒だったが立ち止まることなく名簿を見上げながら「村田か、フン」と一言評を云つて立ち去つてくれた。休み時間を利用して次々と見にやつて来る生徒たちは、同クラスも異クラスの奴らもその反応は殆ど同じだった。模造紙に背を向けて廊下の窓から表を

見るふりをしながらその実こいつらのリアクションを探っていた俺の肩は完全に落ちた。もういい、もうたぐさんだ。これ以上ここにいると自分の存在を皆に気づかれて笑われかねない。やおら窓から離れて歩き出した刹那廊下の端を曲がつてこちらにやつて来る生徒の姿が目に入った。それはいつも取り巻きを2、3人従えている花田という名の生徒で、俺と同クラスで学級委員だったが二年になり次期生徒会長間違いなしとも目されていた。実際中学でも会長をやっていたそうでその名の通り華のある、文武両道の人気者である。普段は影のような俺からすれば眩しいこと限りない、異次元のような存在で、彼に憧れることハンパではなかつたのだが、話しかけることなどもちろん出来ず、互いに勉強が出来るのを幸いに何とか彼の方から話しかけてくれないものかと、女のようにうじうじしてもいたのだった。殆ど彼の定位置のようになっていた首席の位置を今回は俺が占めている。花田は次席で、すれば二人の名は隣り合い、俺の名はどうしても彼の目に付くことだろう。果して俺に対するどういふ感慨を花田は述べてくれるのか、とても気になった。彼さえ俺を認めてくれるなら他の奴らなどもうどう

でもいい、とさえ今は思う。全生徒の憧れの的である彼さえ俺を認めてくれるのなら……。

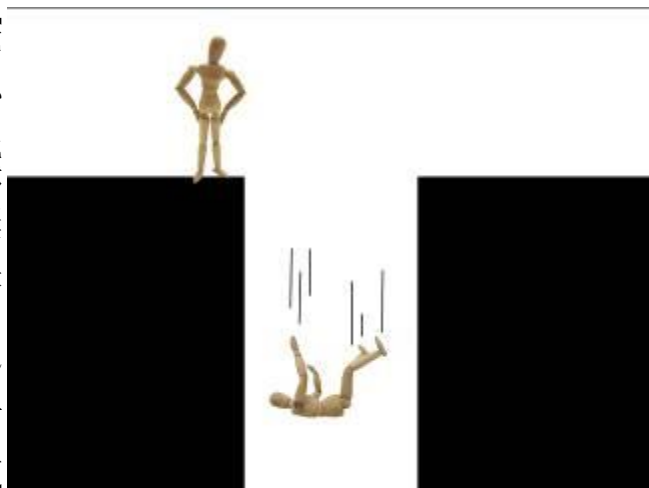
しよげた足を何とか踏ん張って回れ右をし、近づいて来る彼の視線に付くのを避けながら他生徒らの影に隠れつつ彼を待つ。幾許もなく模造紙の前に来て自らの定位置を確かめようとする彼の目に俺の名前が映ったようだ。まずは取り巻きの野口という体育会系的生徒が口を開いた。「あれ、親分（とは花田の渾名だ）、村田つてのが親分の定席を盗つてるけど、これって俺っちのクラスのあの村田かな」「うん？どれ。村田建三郎？…ああ、そうだ。これは奴だよ。うちの村田に違いない」。うちの村田！という花田の言葉に俺は他愛もなく舞い上がった。うちということはずなわち身内。さては彼が仕切る身内の中に俺を入れてくれたのか、と勝手に俺は認識し、続けて肝心の俺の成績へのアセスメント如何に耳をそばだてる。もし彼が俺を評価してくれるとすればこれしかないだろうし、時にこうして彼をも上回る優秀さに一目、い、いや何目でも置いてくれるなら、そして交誼的態度を俺に示してくれるなら、知足安分とは云え以後の学園生活は違つて来るに違いないのだ。しかしまたしても取り巻き

の野口が先に口をきいた。「へー、あの村田ねえ。しかし大したもんだねえ、ついにお前まで抜かしてトップに立つなんて。親分と違つてあいつ家庭教師にも付いてなければ、塾にさえ行つてないんだぜ。へへ、これじゃあさ、親分、お前も形無しだなあ」これにカチンと来た様子の花田が「こら、何だ、その云い方は。家庭教師や塾などに関係なく、本人の努力が要るんだ、努力が」と言う。それに合わせるように今一人の取り巻きの佐藤が「そうだよ、お前、野口よ。親分の首席は年がら年中のことで、今回はたまたま奴の試験予想でも当たつてたんだろうさ。ねえ、親分」と持ち上げるのに「ああ、たぶんな。そんなところだろう。フン、しかし野口よ、こつちの佐藤は毎回この成績優秀者50名の内のどつかに入っているのに、お前と来たらただの一回でも入ったことがないじゃないか」と花田が当てこする。しかし野口は「ねえよ、そんなもん。俺は体育会系だ。勝負するんならこつちの方さ」平然とそう云つて力こぶを作つた二の腕あたりを軽く叩いてみせた。実際その通りで上背のある野口の身体はしなやかでバネがありとんでもないタイムで短距離を駆け抜けそうだった。まだ入学し立ての頃俺がそんな

に孤立していない時に俺は野口ら5，6人の同級生らとボール遊びをしたことがある。地面に置いたバスケットボール一個に輪になった皆が片足を揃え、合図とともに飛び散るのに鬼役の野口が誰かの名前を云って止め、その相手とボールの投げ合いをして勝負をするのだ。すなわち下手投げの決まりがあるとは云え、強烈な投げ合いをやらかして受け損ねた方が負けるのである。そもそも俺を指名したことからして下心見え見えだったが、奴の投げたボールはスナップが効いていて実に強力で、受け損なつた俺は顔面でもともそれを受けてしまった。だいたい顔を狙うのはタブーなのだが野口は最初っから狙っていたし、痛打で赤く脹れた俺の顔を見て謝るのでもなく、ほくそ笑んでいた表情が今でも忘れられない。そこには『テメーの顔が気に喰わない』とハッキリそう書いてあった。

その野口が親分に「ところでさ、親分、気づいてる？これってさ、つまり奴が首席を奪ったのはお前への意思表示だぜ」と余計なことを云う。「ん？意思表示？意思表示って…何の？俺への挑戦、負けじ魂ってか？」「笑わずなよ。奴にそんな根性なんてあるかよ。そうじゃなくって、惚れてんだよ、お前

に。女みたいに。ホントはお前に仲良くしてもらいたいんだけど、気が弱くって云い出せないもんだから……（次号以降に続く）



【花田から地獄に突き落とされる村田君】